

「男、突っ走る！」

第  
107  
回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内 雅也 (24) 『オフィスツリーイン』代表

木内 彦蔵 (83) 雅也の祖父

若村 理香 (27) 雅也の従姉

1 広島駅周辺（夜）

小雨が降っている。  
傘を差してスーツケースを引きずりながら、雅也が歩いている。

2 広島電鉄停留所（夜）

雅也が待っていると、路面電車がやってくる——乗り込む雅也。

3 道路を走る広島電鉄（夜）

4 駅（夜）

雅也が降りてくる——傘を差すと、スーツケースを引いていく。  
横断歩道で立ち止まる雅也——道路を走っていく広島電鉄。

5 商店街（夜）

スーツケースを引いた雅也が、スマホのマップを見ながら周囲を歩いている。

その一角が繁華街のようになっている。

N 「広島に着いた僕は、広島電鉄、通称『広電』と呼ばれる路面電車に乗り、ある駅で降りました。その周辺は、まるで名古屋の大須商店街のように、様々な店が立ち並ぶ商店街通りで、一角には飲み屋等が多いちよつとした繁華街になっていました」

6 テナントビル・表（夜）

雅也がやってくる。

雅也 「あつた、ここだ」

と、エレベーターのボタンを押して、中へ入る。

7 カウンターバー（夜）

テナントの一室にある、小さなカウンターバー。

雅也がドアを開けて入ってくる——常連客と一緒にカウンターで談笑してる雅也の従姉・若村理香（27）。

理香「いらつしやいませ。（と雅也を見ると）

まあ君ッ、久しぶり」

雅也「久しぶり、りかつち」

理香「すぐ分かった？」

雅也「ちよつと迷っちゃった」

理香「この辺は飲み屋もテナントも多いんよ。

まあ、座って」

雅也「うん（とカウンター席に座る）」

理香「（常連客に）私の従弟のまあ君。愛知

から遊びに来たんよ」

常連客「へえ、りかちゃんの従弟。確かに、

どことなく雰囲気似てるわ」

理香「私のお母さんのお兄ちゃんが、まあ君

のお父さんなんよ。昔はさ、よくお盆にな

ると、おばあちゃんの家で集まったっけ」

雅也「そうそう。あと、年末年始もね」

理香「そうじゃったわ。まあ君もケンちゃん

も、よく宿題持ってね」

常連客「ケンちゃんっていうのは？」

理香「まあ君の弟。そういや、この間インス

タの投稿で見たけど、ケンちゃんもう成人式迎えたんやってね。大きくなっただんじやな」

雅也「そうなの。今じゃすっかり生意気になっちゃってね。あの頃の可愛いイメージなんてないんだから」

理香「何か飲む？（とメニュー表を見せる）」

雅也「じゃあ……モスコミュール」

理香「はいよ。まあ君、結構飲むん？」

雅也「強いわけじゃないけど、いろんなお酒は飲めるよ」

理香「私も飲んじやおう。せっかくまあ君が

愛知から来たんやし」

雅也「そうしなよ」

理香「じゃ、遠慮なく」

常連客「りかちゃん、俺も飲むよ。貴重な、りかちゃんの従弟も一緒なんだから」

雅也「すいません、何か」

× × ×

雅也、理香、常連客が飲んでいる。

常連客「へえ、脚本や演劇に広告制作と、随

分いろいろやってるんですね」

雅也「順調だと思った矢先に、コロナでスケ

ジュールが真っ白になっちゃったんですよ。

状況が悪化する前に、久しぶりにこっちの

おじいちゃんやおばあちゃんに会いたいと

思ったんです。なかなか仕事のほうでバタ

バタして、ゆっくりこっちに来れることも

なかったんですけど、まあこのタイミング

は、ある意味では神様がくれた骨休みの時

間だと思って、今回はパソコンも持ってき

ませんでしたし、ホームページにも一週間

お休みをいただきますって告知をしたんで

すよ。演劇レッスンの方も、事情を話して

今週はお休みにしたんです」

理香「まあ君の様子は、SNSで見えてはいた

けど、いろいろやってるもんね。でも、コ

ロナの影響出とるんじゃないろ」

雅也「まあね。専門卒業してすぐの頃は、仕

事の打ち合わせはなくても、営業活動とか

名刺交換会とかで最低限の予定は入ったの。でも、ここまでスケジュールが真っ白になったのは初めて」

理香「この店もさ、いつもはもつと賑わってるんよ。いつもは店長とか他の女の子とかも出勤してるんじゃけど、ここ数日は誰か一人が出勤すれば回るぐらい、お客さんも減っちゃってね」

雅也「やっぱり、コロナの影響？」

理香「間違いないかね。広島は今のところ、それほど感染の影響はなくても、あれだけニュースで取り上げられたら、人との接触も最低限にしたいくなるじゃろ。だから、常連客さんで今は持つてるようなもんなんよ」

常連客「だって、常識的に考えてみてくださいよ。人と人が接触しないと成立しない仕事だってあるんですよ。訳の分からないウイルスのせいで、人と会わないようにするなんて無理に決まってるじゃないですか」

雅也「そうですよね」



理香「いつまで、こんな状態が続くか分からんけどね」

常連客「本当だよ」

雅也「そういえば、りかつち。これ、渡すタ  
イミング忘れてた。(とスーツケースから  
紙袋を出す)これ、地元のお土産」

理香「ありがとう。(と常連客に)食べます？」

常連客「そりゃ、もちろん」

理香、紙袋から菓子箱を取り出して、  
封を開けると、雅也と常連客に渡す。

雅也「(食べながら)このお菓子ね、東京と  
か地方に用事があるときも、お土産で持つ  
てくの」

理香「そりゃみんな喜ぶわ」

雅也「実はね、もう一個、りかつちに見せた  
いものがあってさ」

理香「何じゃ？」

雅也、手帳から一枚の写真を取り出し  
て、理香に見せる——写真右下に

『2000年8月13日』と印字されている、

幼少期の雅也と理香の写真である。

理香「うわ、懐かしい……。これ、おばあちゃん家じゃろ」

雅也「そう。右下に二〇〇〇年の八月十三日って書いてあるから、今から十九年半前だね」

理香「ほぼ二十年じゃ。てことは、私この時、小学二年ってことか」

雅也「うちは、幼稚園の年中になるね」

理香「こんな頃もあったんじゃな。まあ君が、広島に来るのって、いつ以来？」

雅也「確か、専門の二年の夏以来になるから、四年半ぶりになるのかな」

理香「確か、孝志伯父ちゃんたちと、うちのお母さんと、じいちゃんはおばあちゃんたちと回転寿司行ったよね」

雅也「行った」

理香「あれ以来ってこと？」

雅也「そうなるね」

理香「時の流れって、早いんじゃない」

雅也「早いねえ……」

## 8 テナントビル・表

エレベーターから出てくる雅也と理香。

雅也「もう二時じゃん……。いつもこれぐら

いななの？」

理香「早い方よ。一応閉店は三時だけど、お

客さんが盛り上がっちゃうと、四時に閉め

ることもあるの」

雅也「もう昼夜逆転の生活じゃん」

理香「慣れたよ、この生活には」

と、止めてあるタクシーに顔を出すと、

理香「予約した若村です。今日もお願いしま

す」

運転手「いつもどうも。さ、どうぞ」

雅也「タクシーの運転手とも顔馴染みなんだ

……」

## 9 道を走るタクシー

10 そのタクシーの中（夜）

後部座席に座っている雅也と理香。

理香「明日、おじいちゃん家行くんやろ？」

雅也「うん」

理香「何時って言ってる？」

雅也「いや、特には言っていない。けど、尾道

駅に着いたら、一旦連絡することにしてる」

理香「そっか。じゃあ、今日はもう少し起きてられるね」

雅也「え？」

理香「今日はお互い飲んだでしょ。締めで何か食べながら、またいろいろ話そう。積もる話もあるし」

雅也「そうだね」

11 マンション・理香の部屋・リビング（夜）

—DKのマンション。

カップ麺を食べている雅也と、コンビ  
ニのカレーを食べている理香。

理香「まあ君もとうとう、締めラーメン覚

えたんやな」

雅也「まあね」

理香「このマンションね、つい先月まで、二人で住んでたの」

雅也「二人って、まさか……彼氏？」

理香「うん。別れたけどね」

雅也「そっか」

理香「もう男は懲り懲りだわ」

雅也「ふーん」

理香「まあ君は、いないの。好きな女の子とか」

雅也「女友達はたくさんいるけど、特定の子を彼女にするっていうことは、ないかなあ」

理香「私、今年で二十七になったでしょ。うちのお母さんが、私を産んだのが二十四の時。とっくに、私を産んだ年齢越えてるんだよね」

雅也「別に焦ることないんじゃない？今は晩婚化も進んでるし、女性の初婚年齢だつ

て二十八歳前後なんだもの。気にすることないって」

理香「私とまあ君とケンちゃん。誰が最初に、おじいちゃんたちにひ孫の顔見せられるかね？」

雅也「そんなもん、健に決まってるじゃん。あいつね、高校の三年間で、いつの間にか彼女が四人も変わってたんだから」

理香「モテるんやな、ケンちゃん」

雅也「物好きな女もいるもんだね」

理香「まあ、ケンちゃんが良いっていう女の人もおるじゃろ」

雅也「りかつちはさ、歯科衛生士の専門学校出たけど、また現場に戻るつもりはないの？」

理香「どうじゃろ。いくら専門学校出て、国家試験合格して現場で働いても、職場の環境が悪いとさ、働く気にもならないんよ」

雅也「歯医者さんの現場って、そんなにギスギスしてるの？」

理香「まあ、私の就職先が悪かったのかも  
れない。タイミングが合えば、また現場に  
戻ろうとも思うけど。これ以上、親不孝も  
できへんし」

雅也「親不孝って……？」

理香「私ね、一人暮らしするとき、お父さん  
に内緒で家を出たの。お母さんには、友達  
の家に泊まるってことにしてね」

雅也「引っ越しはどうしたの？」

理香「日中、お父さんが仕事でいない間にや  
ったの」

雅也「なるほど」

理香「三日経ってから、お母さんからお父さ  
んに伝えてもらったの。私が一人暮らしを  
始めたことをね。そしたら、お父さん怒る  
どころか呆れちゃって、人として最低だっ  
て言われたの」

雅也「……」

理香「自分でも分かっとなったんよ。お父さん  
が、一人娘の私のことをずっと家に置いて

おきたいって言う気持ちは。でも、私は独り立ちしたくて。じゃから、お父さんには何の相談もしないまま、お母さんにだけはこっそり話をして、引っ越しの時にも協力してもらったんよ。まあ、しばらく経ってから、私が直接家に戻って、説明をしたから良かったんじゃないけど、私が出ていってすぐの頃は、お父さんとお母さんの間もおかしくなって、大変やったんよ」

雅也「そんなことあったんだ……」

理香「まあ君やケンちゃんは、仲良く暮らしてるから、逆に羨ましいけどね」

雅也「うちも、専門学校卒業してすぐに事業始めたでしょ。心配かけてると思ってる。それに健なんか、高校卒業して就職したところ、四ヶ月で辞めちゃったんだけどさ、うちに何の相談もなく、いきなり一言『辞めてきた』って言って、お昼過ぎに帰ってきたことがあってね。あの時は、びっくりした」



理香「じゃあ、今ケンちゃんは何してんの？」

雅也「コンビニで働いてる。アルバイトだけ  
どね」

理香「せやったんか」

雅也、あくびをする。

理香「もう寝る？」

雅也「（時計を見て）うわ、もう四時じゃん」

理香「お風呂呂入って、もう寝ようか」

雅也「うん」

理香「布団、ここに持ってくるわ。私はベッ  
ドで寝るから」

雅也「ありがとう。突然お世話になっちゃつ  
て」

理香「ええんよ。こんな風に、まあ君と二人  
でずっと話すことなんて、これまでなかっ  
たじゃろ。よう来てくれたわ」

雅也「りかつち……」

12 同・全景（翌朝）

13 同・理香の部屋・リビング

雅也が眠っている——ドアが開いて、  
理香が戻ってくる。

理香「ただいま」

雅也、ゆっくりと目を開けて、

雅也「あれ、もう朝？」

理香「今九時半」

雅也「もう九時半と言うべきか、まだ九時半  
と言うべきか」

理香「よく寝れた？」

雅也「多分」

理香「熟睡してたよ。まあ、長旅の疲れもあ  
ったんじゃない」

雅也「かもね」

理香「パン買ってきた。すぐ、そのベーカ  
リーなんやけど、美味しいんよ」

雅也「ありがとう」

理香「食べよ」

雅也「うん」

パンを食べ始める雅也と理香。

14 道く駅

雅也と、スーツケースを引いた理香が歩いている。

理香「こつちには、いつまでおるんじゃ？」

雅也「明後日の夕方には、帰る予定」

理香「じゃあ、やっぱりうちのお母さんも明

後日行くんかな」

雅也「え、もっちゃん来るの？」

理香「毎月一回は、じいちゃんやばあちゃんの様子を見るために、行ってるんよ。ただ、

この間連絡したら、今月は月末も行くって。

多分、ばあちゃんがうちのお母さんに、ま

あ君が来ること伝えたんじゃろ」

雅也「もしかしたら、うちの父さんも伝えたのかもしれない」

理香「ああ、それもあるかもしれない」

雅也「もっちゃんにも会えるとは思ってなかったから、楽しみだわ」

理香「せっかく広島に来たんじゃけえ、ゆっ

くりしていくんじゃね」

雅也「うん」

と、駅までやってくると、

理香「福山方面行に乗れば、途中で尾道に着く。各駅だから、多分一時間ぐらいかかるかな」

雅也「ゆっくり本読んでく。ありがとう、お世話になりました」

理香「こちらこそ。孝志伯父ちゃんや、真保ちゃん、ケンちゃんにも、またよろしくね」

雅也「うん」

理香「じゃあね」

雅也「じゃあね、ありがとう」

と、スーツケースを受け取ると、駅の中へ入っていく——手を振って見送る理香。

15 線路を走るJR山陽線

16 尾道駅・表

造船場やクレーンなどの景観が広がる。  
スーツケースを引いた雅也が降りてくる。

N 「造船場やクレーンと言った、尾道特有のこの景観は、小さい頃に祖父母の家に遊びに行くとき、父の車が走る尾道海峡から何度も見ただ懐かしい光景でもありました」

雅也、スマホで『尾道駅』の看板や、  
景観の写真を撮影する——電話をかける  
と、

雅也 「もしもし、おばあちゃん。まあ君だけ  
ど。今ね、尾道駅に着いた。え？ おじい  
ちゃん、もうこっち来てるの？ （と周囲  
を見渡すと）うん、あ、あるよ歩道橋とい  
うか、連絡通路みたいところ。うん、あ  
るね、フェリー乗り場。じゃあ、そこにい  
けば、おじいちゃん待ってるんだね。はい  
はい、分かりました。じゃあ、後ほど。は  
ーい」

と、電話を切ると、スーツケースを引

きながら歩いていく。

17 フェリー乗り場

スーツケースを引いた雅也がやってくる——歩道橋の下の柱にもたれている、男性の後ろ姿がある。

雅也 「おじいちゃん！」

男性の後ろ姿が、雅也のほうを振り向く——雅也の祖父・木内彦蔵（83）である。

彦蔵 「おお、雅。よう来たのお」

笑顔で彦蔵を見ている雅也。

つづく